フンダウアー・生涯と思想 上

はじめに

最初に、あまり知られていないと思われるランダウアーの生涯といる。

も、一般にはほとんど無視もしくは軽視されてきた。の面でもとりあげられること少く、またアナキズム 思想家 とし てアイスナーとともに、ドイツ革命の三大殉教者と目されながら、そグスタフ・ランダウアーは、ローザ・ルクセンブルク、クルト・

は、スペイン革命で著名なディエゴ・アバド・デ・サンティリャン語に訳されたくらいである。『社会主義へのよびかけ』を訳したのが、オランダ語とイーディッシュ語に訳され、その後には『革命』(一九〇七)と『社会主義へのよびかけ』(一九一一)がスペインが、オランダ語とイーディッシュ語に訳され、その後には『革命』が、オランダ語とイーディッシュ語に訳され、その後には『革命』が、オランダ語とイーディッシュ語に訳され、その後には『華命』が、オース・アバド・デ・サンティリャンは、オース・アバド・デ・サンティリャンは、オース・アバド・デ・サンティリャンは、オース・アバド・デ・サンティリャンは、スペイン革命で著名なディエゴ・アバド・デ・サンティリャンは、オース・アバド・デ・サンティリャンは、オース・アバド・デ・サンティリャンは、スペイン革命で著名なディエゴ・アバド・デ・サンティリャンは、スペイン革命で著名なディエゴ・アバド・デ・サンティリャンは、スペイン革命で著名なディエゴ・アバド・デ・サンティリャンない。

長谷川

う。であり、これにはネットラウのランダウアー評伝が付してあるとい

ところが、近年、『社会主義へのよびかけ』や論文集の新しい版 のうち、アムステルダム国際社会史研究所の所蔵する「ランダウア ー文庫」の未刊の資料を多く用い、叙述はよく整理され てい ないが、ランダウアーの全体像をよく描き出していると思われるのは、 Eugene Lunn, Prophet of Community, The Romantic Socialism of Gustav Landauer, 1973 である。

れに負うものである。 大部分をこ本稿は、一々引証はしないが、別に示したもの以外、大部分をこ

らは未刊である。 アメリカではいくつかの学位論文のテーマにもなっているが、これでは、ランダウアーにふれた書物や論文はかなり多く出ている。

2 生いたちと学生時代

を生む下地をなしたと見ることができるであろう。
ルルスルーエ市で、中産階級のユダヤ人家庭に生れた。しかし、この生れた都市よりも、両親の出身地で、少年時代に夏よく訪れ親しんだ、旧公国領ヴュルテンベルクの田舎町シュヴァビアに強い愛着を抱いた。このことは、気質においても思想においても多く共通すを抱いた。このことは、気質においても思想に生れた。しかし、この生れた都市よりも、両親の出身地で、少年時代に夏よく訪れ親しの生れた都市よりも、気質においても思想に生れた。したし、大阪のカースルースルースを開発して

ランダウアーは、ユダヤ人として生れたけれども、ユダヤ教には ・ これは訂正しなくてはならない。 ランダウアーは、いわゆる 説)、 これは訂正しなくてはならない。 ランダウアーを同化を立 場とした者のように私は書いたが(ブーバー『ユートピアの途』解 場とした者のように私は書いたが(ブーバー『ユートピアの途』解 場とした者のように私は書いたが(ブーバー『ユートピアの途』解 した意味でのユダヤ民族的特性を自ら尊重し、その思想の中にも生か た意味でのユダヤ民族的特性を自ら尊重し、その思想の中にも生か している。他の者からは、旧約預言者とのつながりも指摘されてい る。

ざめた。一五歳のランダウアーのモットーは、「男らしくあれ!」もりであった。しかしグスタフは早くから文学や哲学に 興 味 をももであった。しかしグスタフは早くから文学や哲学に 興 味 をももりであった。しかしグスタフは早くから文学や哲学に 興 味 をもく 父を説得して古典教育に重きをおくビスマルク高等学校にはいち、父を説得して古典教育に重きをおくビスマルク高等学校にはいなのベルマンは、グスタフをカルルスルーエの実科高校 に 通わ

してくれた、と日記に書いた。 これによっておいました。 であいて残った経験は、ワーグナーのオペラの演奏を聴いた こと で あいに残った経験は、ワーグナーのオペラの演奏を聴いた こと で あしてくれた、と日記に書いた。

この無意識のアナキズムは、周囲の「俗物」社会に対するロマン

チックな拒否であり、因襲社会の慣習と制度からの独立の主張であいてなかったが、学生仲間の文学や哲学の会には積極的に 参加 し心でなかったが、学生仲間の文学や哲学の会には積極的に 参加 し心でなかったが、学生仲間の文学や哲学の会には積極的に 参加 しんでなかったが、学生仲間の文学や哲学の会には積極的に 参加 しんでなかったが、学生仲間の文学や哲学の会には積極的に 参加 しんでなかったが、学生仲間の文学や哲学の会には積極的に 参加 した。関心はやがてワーグナーやショーペンハウエルからはなれ、イた。関心はやがてワーグナーやショーペンハウエルからはなれ、イた。関心はやがてワーグナーやショーペンハウエルからはなれ、イ

である。

O著作を集中的に研究した。ランダウアーの知的発展において、の著作を集中的に研究した。ランダウアーの知的発展において、可力と考えている。したがってただアナキズム的・社会主義的(ランダウアーは自己の思想をアナルコ・ソシアリズムとよび、両者を不可ウアーは自己の思想をアナルコ・ソシアリズムとよび、両者を不可ウアーは自己の思想をアナルコ・ソシアリズムとよび、両者を不可ウアーは自己の思想をアナルコ・ソシアリズムとよび、両者を不可ウアーは自己の思想をアナルコ・ソシアリズムとよび、両者を不可ウアーは自己の思想をアナルコ・ソシアリズムとよび、両者を不可力と考えている。したがってただアナキズム的・社会主義的(ランダウアーは自己の思想をアナルコ社会主義の意味である)活動主義へと進むに必要な橋渡しをなすものであった。一八九二年友人に、ニーチェは十分に「ショーペンハウエルの誤りを識り克服した」と書き送った。の説教者」(Der Todesprediger, 1893)である。これは、生の絶望と死への渇望とから生命の悦びを経験する男を主人公とする物語望と死への渇望とから生命の悦びを経験する男を主人公とする物語である。

は、当時のロマン主義的青年たちと等しく、人間を意志の所産と考しれを要するに、若いランダウアーがニーチェから汲みとったの

となったととはいうまでもない。となったととはいうまでもない。これがマルクス主義拒否の一因を特質とすると見ることにあった。これがマルクス主義拒否の一因を特質とすると見ることにあった。これがマルクス主義拒否の一因を特質とすると見ることにあった。これがマルクス主義拒否の一因となったととはいうまでもない。

しかし他方ランダウアーは、ニーチェの貴族的エリート主義や人種へのコミットメントという、この消極積極の二つの要求をいかにして満たすか、これがすでに当時からの生涯をつらぬく主要関心にして満たすか、これがすでに当時からの生涯をつらぬく主要関心にして満たすか、これがすでに当時からの生涯をつらぬく主要関心にして満たすか、これがすでに当時からの生涯をつらぬく主要関心にして、これを意味するのである。

一八九一年の論文「宗教的青年教育」でランダウァーは、個人の安全人類への結合を強調し、「われわれの目標は」、たんに「個人の安楽を確保する」ととではなく、「全人類の教育」と、「人間タイプのが社会問題の務心と見るのは、「ただ肉体的で精神を欠く労働」へが社会問題の核心と見るのは、「ただ肉体的で精神を欠く労働」への嫌悪と「より高い生活様式への熱情」であり、このため「社会問題」を解決しなければならないと書いた。だがここでランダウァー題」を解決しなければならないと書いた。だがここでランダウァー超」を解決しなければならないと書いた。だがここでランダウァー超」を解決した。「全人類の教育」と、「人間タイプの本語、「大力」と、「大力」、「大力」と、「大力」と、「大力」、「大力」」と、「大力」と、「大力」と、「大力」と、

ン大学に戻り、ドイツ文学、芸術史を学ぶことになるが、もはや前一八九一年四月ランダウァーは、ストラスブールから再びベルリ

の教育を受けることになる。

な、文学ボヘミアン、美的追求者としてではなかった。人間のような、文学ボヘミアン、美的追求者としてではなかった。人間のような、文学ボヘミアン、美的追求者としてではなかった。人間

3 社会運動への参加

(SPD)は躍進し、一八八一年には約三一万二千であった得票を、一八九○年には一四二万七千にのばし、社会主義の大衆的高まりを見せていた。こうした中で文学者たちの社会的関心も強まり、その見せていた。こうした中で文学者たちの社会的関心も強まり、その見せていた。こうした中で文学者たちの社会的関心も強まり、その見せていた。こうした中で文学者たちの社会的関心も強まりを見せていた。それにつれて社会民主党という。

一八九一年秋、ランダウアーはマルクス主義学生たちに、その年の著しい一つは、社会主義の歴史的必然性を強調しないことた。その著しい一つは、社会主義の歴史的必然性を強調しないことであった。

30

ランダウアーのマルクス主義は、マルクスの極度に歴史主義的立場を自己の主意主義的立場で解釈し直したものであり、その声明文が大会(自分は欠席した)で朗読されたとき、なんども 喝 采 さ れた。大会で、アナキストを排除し、正統マルクス主義、「科学的社会主義」をとる第二インターナショナルの主張をくりかえす決議が会主義」をとる第二インターナショナルの主張をくりかえず決議が会主義」をといった。

した予言者の一人がニーチェであった。を観察する芸術家ではなく、現在の皮をはぎ、将来を明らかにするを観察する芸術家ではなく、現在の皮をはぎ、将来を明らかにするを観察する芸術家ではなく、現在の皮をはぎ、将来を明らかにするを観察する芸術家ではなく、現在の皮をはぎ、将来を明らかにするといれた。

僚制に対する攻撃に根ざしていた。一八九六年のある論文でランダ会主義を放棄し、またSPDからも追放され、自己のアナルコ・ソ会主義を放棄し、またSPDからも追放され、自己のアナルコ・ソ会主義を放棄し、またSPDからも追放され、自己のアナルコ・ソ会主義を放棄し、またSPDからも追放され、自己のアナルコ・ソ

ズムの温床である」と述べた。

会に出席した。

今に出席した。

今に出席した。

今に出席した。

今に出席した。

今に出席した。

今に出席したがあり、彼らは一八九一年一一月「独立社会主義大者同盟」を結成しており、ランダウアーは彼らと相結んでいた。そ年」と称する一団があり、彼らは一八九一年一一月「独立社会主義き、実質上アナキズムをとるにいたった青年たち、「ベルリンの青さ、実質上アナキズムをとるにいたった青年たち、「ベルリンの青さ、実質上アナキズムをとるにいたった青年たち、「ベルリンの情にない。

ランダウアーはこの団体の週刊機関紙の編集に参加し、しばしばランダウアーはこの団体の週刊機関紙の編集に参加し、しばしばボンとの共通点を指摘しているという。

前にまでおよんでいる。

「見解のちがいと分裂は、自由民衆劇場においても起った。それが見解のちがいと分裂は、自由民衆劇場においても起った。それが見解のちがいと分裂は、自由民衆劇場においても起った。それが

のアナキズム新聞となった。いまやランダウアーは、アナキストたのリーダー格となり、『デア・ゾチアリスト』は当時ドイツで唯一きりアナキズムの立場をとる左派とに分裂し、ランダウアーは後者「ベルリンの青年」も一八九三年、SPDに復帰する右派とはっ

る自覚の下にベルリンでの政治闘争に参加するにいたった。

では、 SPDに対抗して労働者階級に提唱した方途は、のちにアナルコサンディカリズムとよばれたものに等しく、労働組合を結た。この時期の一八九三年一○月、「法律への不服従」を唱えた論た。この時期の一八九三年一○月、「法律への不服従」を唱えた論た。この時期の一八九三年一○月、「法律への不服従」を唱えた論た。この時期の一八九三年一○月、「法律への不服従」を唱えた論なる。第一期(一八九三-九三年)に対策を宣告された。第一期(一八九三-九三年末)に、現政治制度の顕覆を宣伝したという罪でさらに六ケ月の投獄を宣告された。

都市的展望に傾くことになる。
和市的展望に傾くことになる。
の焦点を手工業労働者と農民におくにいたった。
かくして前期のマの焦点を手工業労働者と農民におくにいたった。
かくして前期のマの焦点を手工業労働者と農民におくにいたった。
資本主義体制から焦めである。
との時期には、
のの方策にとっていたの生産・消費協同組合の建設に集中し、
連動に基本の方策にとっていたが、
第一期の方式は効を奏しなかった。
そこで 活動 は 第二期
にが、第一期の方式は効を奏しなかった。
そこで 活動 は 第二期

の再生」であることを力説した。
の再生」であることを力説した。
の再生」であることを力説した。
の再生」であることを力説した。
の再生」であることを力説した。
の再生」であることを力説した。
の再生」であることを力説した。

盲目的信従」にあるとする考えがあり、また、バクーニンやクロポーとのような主張の根底には、国家権力の根源が「大衆の権威への

の見方、いわば方法的個人主義にあると思う。の論拠は、ランダウアーの考えの根本的特徴、徹底的な「個」基本が精神的退廃をもたしているとする見方がある。さらにいえば、そトキンのように下層階級を理想化することなく、彼らの経済的困窮

にしたい。

「世界のと思われる。次回でできれば要点なりとりあげることを実によせて」が、たぶんシュティルナー批判をもふくみ、きわめ月から翌年二月にかけ六回にわたって掲載された長い論文「個体発用から翌年二月にかけ六回にわたって掲載された長い論文「個体発力の問題については、『デア・ゾチアリスト』の一八九五年一一

である。しかしランダウアーのこのような考えと方途は、ベルリかである。しかしランダウアーのこのような考えと方途は、ベルリルである。しかしランダウアーのこのような考えと方途は、ベルリルである。しかしランダウアーは、現存秩序の暴力的顕覆は、特に軍隊が政府に忠誠ランダウアーは、現存秩序の暴力的顕覆は、特に軍隊が政府に忠誠ランダウアーは、現存秩序の暴力的顕覆は、特に軍隊が政府に忠誠ランダウアーは、現存秩序の暴力的顕覆は、特に軍隊が政府に忠誠ランダウアーは、現存秩序の暴力的顕覆は、特に軍隊が政府に忠誠ランダウアーは、現存秩序の暴力的顕覆は、特に軍隊が政府に忠誠ランダウアーは、現存秩序の暴力的顕覆は、特に軍隊が政府に忠誠ランダウアーは、現存秩序の暴力的顕覆は、特に軍隊が政府に忠誠ランダウアーは、現存秩序の暴力的顕覆は、特に軍隊が政府に忠誠の方法を表す。

き、ウイリアム・モリスはこれに支持のメッセージを寄せた。フイス、その他ヨーロッパの指導的アナキストが多く出席した。しかしアナキストたちは二日目に大会から閉め出され、別に大会を開かしアナキストたちは二日目に大会から閉め出され、別に大会を開ウンダウアーは、一八九六年夏ロンドンで開催の国際社会主義大ランダウアーは、一八九六年夏ロンドンで開催の国際社会主義大

の支持を得ることの重要性を語り、ランダウアーは協同組合の意義大会でマラテスタとニューウェンフィスは社会変革の企てに農民

う。」 ・イエズス会的教義を信じない。……われわれは、農民たちが彼的・イエズス会的教義を信じない。……われわれは、農民たちが彼的・イエズス会的教義を信じない。……われわれは、農民たちが彼の破滅を社会主義実現の必要条件とみなすマルクス主義 の 宿 命 論を強調してこう述べた。「アナキストはもはや、資本の集中と小農を強調してこう述べた。「アナキストはもはや、資本の集中と小農

ら一八九九年ついに廃刊することになった。

吸収されていたのである。ま深めた。SPDとその改良主義的組合にますます多くの労働者がよ深めた。SPDとその改良主義的組合にますます多くの労働者がよいたが、予期の成果を収めることなく、孤立をいよいまで

連続講義を行なった。からベルリンのコンサート・ホールでドイツ文学に関する二一回のからベルリンのコンサート・ホールでドイツ文学に関する二一回のからベルリンのコンサート・ホールでドイツ文学に関する二一回のからベルリンのコンサート・ホールでドイツ文学に関する。早くも一八九八年三月からでは、その後一○年にかくてランダウアーはアナキズム運動から離れ、その後一○年に

4 神秘主義およびロマン主義への傾き

ではならないため、いまはただ表面的な事実をたどるとしよう。 くてはならないため、いまはただ表面的な事実をたどるとしよう。 は想的転回の少くとも一つときっかけとなったのは、一九○○ 思想的転回の少くとも一つときっかけとなったのは、一九○○ 思想的転回の少くとも一つときっかけとなったのは、一九○○ に加わったことである。これはハインリッヒおよびユンシャフト」に加わったことである。これはハインリッヒおよびユンシャフト」に加わったことである。これはハインリッヒおよびユンジャフトー

人の出会いをこう述べている。 ともあれ、ランダウアーにとってこのグループとの結びつきはき ともあれ、ランダウアーについても多く言及している)で、ニー評伝(これはランダウアーについても多く言及している)で、ニー評伝(これはランダウアーにとってこのグループとの結びつきはき 人の出会いをこう述べている。

れているのではないかと思う。というのは、先年、やはりブーバーれているのではないかと思う。というのは、先年、やはりブーバーなみに、ブーバーはランダウアーの遺稿を数巻編集し出版したが、なみに、ブーバーはランダウアーの遺稿を数巻編集し出版したが、なみに、ブーバーはランダウアーの遺稿を数巻編集し出版したが、なみに、ブーバーはランダウアーの遺稿を数巻編集し出版したが、なみに、ブーバーはランダウアーの遺稿を数巻編集し出版したが、なみに、ブーバーはランダウアーの遺稿を数巻編集し出版したが、なみに、ブーバーの生涯における画期的な「八歳上の友人との出会いは、ブーバーの生涯における画期的な「八歳上の友人との出会いは、ブーバーの生涯における画期的な

出があるからである。 編の遺著『シエークスピア講義』を偶然神田の古本屋で見つけた思

に、本当に親密にはならなかったという。 とるランダウアーは、ミューザムとはそのバクーニン的傾向のゆえとるランダウアーは、ミューザムとも識り合った。しかし非暴力の立場をとるテンダウアーは、ミューザムとも識り合った。しかし非暴力の立場をとるデンダウアーはまたこのグループで、さて、わき道へそれたが、ランダウアーはまたこのグループで、

たら共同体は生れないか」を教えたという。 といってら共同体は生れないか」を教えたという。 しょうとする意欲は乏しく、そうしたことであきたらなくなったランダウアーはやがてグループからはなれた。 ブーバー に よる と、「ディ・ノイエ・ゲマインシャフト」はランダウアーに、「どうしたら共同体は生れないか」を教えたという。

して共同体へ」と同じ年雑誌『ディ・ツークンフト』に発表した論旨と文「アナキズムに関する混乱した諸思想」は、ランダウアーにおけ文「アナキズムに関する混乱した諸思想」は、ランダウアーにおける共同体思想の明確化と後にアナキズム的ジードクング(セツルメント)の建設に乗り出す理論的根拠を示すものとして重要である。 前者は、古い共同体から己れを徹底的に引離す場合にのみ、われ がおい、必要とする新しい共同体を見出し得ることを論旨と われの渇望し、必要とする新しい共同体を見出し得ることを論旨と われの渇望し、必要とする新しい共同体を見出し得ることを論旨と

が、ランダウアーにおいてはむしろ民衆の意味合が強いと思う。い有化の問題ではなく、新しいフォルク(ふつうは民族と訳 される問題ではなく生活の問題である。これは、過去に獲得した物資の国問程ではなく生活の問題である。これは、過去に獲得した物資の国

である。……」

・
は、大衆からおのれた。

・
は、大衆からおのれを引離した、自い共同体にまで自己を形成する。結局、それは、所有者に対する無い共同体にまで自己を形成する。結局、それは、所有者に対する無い共同体にまで自己を形成する。結局、それは、所有者に対する無い共同体にまでもる。

・
は、国内移

一方、ランダウァーは以前からドイツ中世の神秘思想、特にマイランダウアーに深い感銘を与えたという。 ランダウアーに深い感銘を与えたという。 一方、ランダウァーは以前からドイツ中世の神秘思想、特にマイル○二年『懐疑と神秘』として出版した。 でれは、友人の言語学者フリッツ・マウトナーの言語批判版した。 ではユダヤ教神秘主義のハシディズムの研究を発表し、また一九○ 大年にはユダヤ教神秘主義のハシディズムの研究を追じめ、これは、 大年にはユダヤ教神秘主義のハシディズムの研究をはじめ、これは、 大学の学術を見いており、その著作を最初に現代ドイツ語 大学にはユダヤ教神秘主義のハシディズムの研究をはじめ、これは 大学の神秘思想、特にマイーングウアーに深い感銘を与えたという。

ところで、ランダウアーは一九○三年ベルリン郊外の小村へルムスドルフに引移り、また「ドイツ田園都市協会」なるものに入会したが、こうしたことは、その頃親しく交っていたネットラウによると、ランダウアーはこの協会に、石造りの都市の悪い点を壊し、人と、ランダウアーはこの協会に、石造りの都市の悪い点を壊し、人人に自然により近い生活の必要なことに気づかせ、その自発的協力においてだけでなく、いまここでの協力と活動に対する自信を強めにおいてだけでなく、いまここでの協力と活動に対する自信を強めたというが、ここにもロマンチックな反都市的社会主義への傾向がたというが、ここにもロマンチックな反都市的社会主義への傾向がたというが、ここにもロマンチックな反都市的社会主義への傾向がたというが、ここにもロマンチックな反都市的社会主義への傾向がたというが、ここにもロマンチックな反都市的社会主義への傾向がたというでは、

一九〇三年ヘルムスドルフに転居する前、ロンドン大会出席のた

か、二度目の妻で詩人のヘドヴィヒ・ラハマンとイギリスに渡り、め、二度目の妻で詩人のヘドヴィヒ・ラハマンとイギリスに渡り、め、二度目の妻で詩人のヘドヴィヒ・ラハマンとイギリスに渡り、いる。

34

下ランダウアーは、温和な性質で正義心の強い人であった。この 「ランダウアーは、温和な性質で正義心の強い人であった。この た。」バイエルン革命を経た後のランダウアーに対するロッカーの た。」がは、終生社会運動に積極的に できるの、ときとして彼は厳しい判断をし、不当でさえあることがなく ではならない。

の渦中にある人々の手紙を翻訳し註釈して編集した大著『フランスイルドの『社会主義と人間の霊魂』等を訳し、なおフランス大革命成果として、前記のクロポトキンの著作の翻訳のほか、タゴールの成果として、前記のクロポトキンの著作の翻訳のほか、タゴールのよ深め、主として研究と文筆活動にたずさわることになった。そのよ深め、主として研究と文筆活動にたずさわることになった。そのよ深め、主として研究と文筆活動にたずさわることになった。

大革命からの手紙』(三巻、一九一九年、新版一九六一年)等がある。
 大革命からの手紙』(三巻、一九一九年の社会主義同盟と第二次『デットプランは、神秘的・ロマン主義的・民族的諸傾向とリバータリアン社会主は、神秘的・ロマン主義的・民族的諸傾向とリバータリアン社会主は、神秘的・ロマン主義的・民族的諸傾向とリバータリアン社会主は、神秘的・ロマン主義的・民族的諸傾向とリバータリアン社会主は、神秘的・ロストーのでは、バイエルン革命にいたる十数年の歳月

であり、いまはごく表面的なことに たどめる。「社会主義テーゼ三○」は、まえに述べた社会主義同盟 がウアーの歴史哲学を述べたものである。これはロマン派的中世主 がウアーの歴史哲学を述べたものである。これはロマン派的中世主 がウアーの歴史哲学を述べたものである。これはロマン派的中世主 がウアーの歴史哲学を述べたものである。これはロマン派的中世主 がウアーの歴史哲学を述べたものにある。 では、少しあとに出た『中世の秋』におけるオランダの著名な歴 大助論』の影響が強く出ている。なお、ランダウアーの中世観につ がウアーの歴史哲学を述べたものである。 では、ランダウアーの中世観につ がっては、少しあとに出た『中世の秋』におけるオランダの著名な歴 大助論』の影響が強く出ている。なお、ランダウアーの中世観につ がっては、少しあとに出た『中世の秋』におけるオランダの著名な歴 がっては、少しあとに出た『中世の秋』におけるオランダの著名な歴 がっては、少しあとに出た『中世の秋』におけるオランダウスがあるといわ

の場合であったろう。
の場合であったろう。
できわりに早くから知られ、おそらくその唯一やアーの名がこの国でもわりに早くから知られ、おそらくその唯一その『イデオロギーとユートピア』でとりあげているため、ランダ

だが、マンハイムのとりあげ方はきわめて不正確である。マンハ

集と安定)とその変革・革命を意味するユートピア(個人主義と社集と安定)とその変革・革命を意味するユートピア(個人主義と社会的不安定)との二分法で説明しているかのごとく解し、批判しているが、ランダウアーの真意はそこにはない。むしろランダウアーは、いわゆる科学的歴史観を批判するため、「おもしろ半分に」にトピアという概念をつくり出したのであり、トピア・ユートピアの二分法で歴史を説明するような単純主義に陥ってはいない。しかし、ついでにいうと、マンハイムが末尾の註でヘーゲルの見方とランダウアーの見方とをまさに対照的なものとして引用しているのははなけている。

ところで、ランダウアーにとっては、ヨーロッパにおいて革命はところで、ランダウアーにとっては、ヨーロッパにおいて革命はところで、ランダウアーにとっては、ヨーロッパにおいて革命はという時期は、人々が有機的な共同体とさまざまの自主独立的な集団に生活の根を下ろい、精神的にも強く結ばれていた状態から、近代国家と資本主義経済の成立発展による社会的原子化と権威主義的中央集権化とに向うがの成立発展による社会的原子化と権威主義的中央集権化とに向うを決していまれたような共同体的生活を現代の条件の下にとり戻すのが、ランダウアーの革命である。

義、キリスト教主義ではなく、この点アダム・ミュラー、ド・メーしくとりあげなくてはならないが、誤解をさけるためにつけ加えておきたいのは、ランダウアーの中世主義ともいえる考えは、けっしおきたいのは、ランダウアーの中世主義ともいえる考えは、けっしむろん、こういっただけでははなはだ不十分であり、次回でくわむろん、こういっただけでははなはだ不十分であり、次回でくわ

ダーから多くを学びとった民主的、ヒュマニタリアン的、コスモポしろそれは、一八世紀末葉の思想家ヨハン・ゴットフリート・ヘルトル、ノヴァリス、シュレーゲル等とは遠く異なることである。む タン的なそれであり、しかもこれに独自の民族主義、神秘主義、リ ータリアニズムが結び合っているのである。

5 社会主義同盟・第二次『デア・ゾチアリスト』紙 (一九〇九一一五)

前記の論文「フォルクと土地・社会主義テーゼ三〇」は、ベルリ

月に発刊され、一九一五年、世界大戦のために廃刊をよぎなくされ 二回刊行の機関紙、第二次『デア・ゾチアリスト』が一九〇九年一 最初のグループが結成され、ブーバーとミューザムもすぐこれに参 るまでつづいた。かくして、ランダウアーは孤立から脱することに ンのアナキストや独立社会主義者たちの関心を引き、度々招かれて した。こんどはランダウアー一人を責任編集者とする月やがて週 これがきっかけになって一九○八年六月、社会主義同盟の

紙であり、「社会主義の全領域にわたって発展せしめるべき社会主 るところが最も多いことは確かである。なお、事情にくわしいネッ だいたいでき上ってからだともいっているが、 偉大な社会主義者」である。プルードンを知ったのは自分の思想が ウアーにとってプルードンは、「すべての社会主義者のうちで最も ほとんど毎号プルードンに関する論文や翻訳が掲載された。ランダ - ラウによると、この新聞は、当時世界で最もすぐれたアナキズム この新聞にはランダウアーの多くの重要な論文が発表され、また 二人の間には共通す

> 義の核心、実行すべきさまざまな可能事のいくつかを絶えずたゆみ なく探究した」という。

だ集中化された権力を永続化するにすぎないことを主張するにあっ を要するに、社会主義建設の即時的開始の必要なこと、社会主義は グ(セツルメント、コミューン)を直ちに建設するにあった。これ 的理論に従って、権威主義国家と中央集権的・都市的資本制の埓外 追って訳出したい。 た。(これに関する最初のビラ、「社会主義同盟は何を欲するか」は 直接の攻撃は、その権力の源泉を除去するものでなく、かえってた 政治革命からは発展しないであろうこと、なぜなら、国家に対する に、社会主義の領域、「とび地」、すなわちアナキズム的ジートルン ところで、社会主義同盟の目標は、ランダウアーの社会的・政治

義者や他のアナキストたちとちがって、社会主義同盟のメンバーと 区(コミューン)をモデルとなすべきであるとし、 してあらゆる社会集団と階級からの異質的分子を集めることを求め 区(コミューン)をモデルとなすべきであるとし、またマルクス主いて述べ、これにはフランス大革命における都市のセクションや地 またほかの場所で、社会主義同盟の分権的・連合主義的構成につ

を築くに役立つべき自由な学校」の建設を計画したが、これの実現 は非現実的と見られたのである。ランダウアーは、「共同体的基礎 は反工業的・反都市的傾向にもあった。結局、 せいぜい千名であった。その呼びかけは労働者に訴えるところ少な 盟を構成するグループの数はスイスをもふくめて一八、メンバーは く、それに応ずるのは教育程度の高い中産階級であった。その原因 しかし実際の活動はごく限られたものであった。一九一二年、同 社会主義同盟の活動

を見るまでにはいたらなかった。

とを主張した。こうした大多数アナキストの考えに対するランダウ 民族主義的・反都市的指向と国家の見方にあった。一九一二年、親 かではなく、それを不要とすべき社会的現実を直ちに建設すること 解を攻撃し、プロレタリアートのみが現存体制顚覆の意欲をもつこ によってのみ破壊可能であるというにあった。 アーの回答は、国家は、革命によって破壊できるような外部的な何 しく交ってきたピエル・ラムスも、ランダウアーの全民族解放の見 と衝突状態にあった。彼らとの基本的なちがいは、ランダウアーの 一九〇九年以後ランダウアーは、ベルリンのアナキストの大多数

批判をとおして発展させたのが、主著『社会主義への呼びかけ』で アナルコ・ソシアリズムを、マルクス主義の理論と実践とに対する 同志たちの一般的不評のなかにありながら、ランダウアーがその

問題は改めてあつかわなくてはならないが、ランダウアーが一九一 主義政党たるドイツ社会民主党が批判の対象にもなっていた。この ることができるであろう。ランダウアーの場合、代表的なマルクス われた諸革命の現実は、むしろランダウアーの言に先見の明を認め がいない。だがその後のマルクス主義の歩み、その名において行な か前のことであり、今から見れば不十分かつ不正確な点もあるにち 判は、『経・哲手稿』や『ドイツ・イデオロギー』が知られるはる ある。何か奇矯に聞こえるかも知れない。またそこでのマルクス批 主義運動の呪いであることを面と向っていわなければならない」と その最初の個所に、「マルクス主義は、時代の疫病であり、社会 年のある論文で述べている次の点は、きわめて重要であろう。

> いであろうか。しかもいうところの「国家なき社会」への方策はほれが、今日おそらくほとんどすべての「社会主義国」の現実ではな ろ「国家がこれら社会主義者を国家崇拝者に変えるであ ろう」。こ とんど何も講じられていないのである。 ルクス主義者たちは「国家を社会主義に変えるのでは なく」、 む

的すなわちアナキズム的ジートルングまたは共同体ないしコミュー ム思想の確立につとめるとともに、社会主義同盟の活動、社会主義 はいま不明である。 ンの建設に力をつくした。これがどのような成果を収めたかいなか 一九〇八一一一年にランダウアーは、そのアナルコ・ソシアリズ

争の問題に取組むことになる。 戦争脅威のつのる中でナショナルの問題に関心をひかれ、 しかし一九一一年以後、ヨーロッパ国際関係の緊張化とさし迫る やがて戦

6 第一次大戦と反戦その他の活動

あった。この主張を数々の書物や一九一五年廃刊をよぎなくされる と暴力の構造である国家とは別個の、平和の共同体であるとするに 民族は普遍的人類の反映であり、それへの寄与者であって、強制力 国人排斥に対抗した。ランダウアーの主張するところの基本は、各二〇世紀にかけてひろまった反動的民族主義者たちの国家崇拝と外 展開すると同時に、ドイツの初期ロマン主義思想家の文化的・コス 間の緊張と敵意はいよいよ高まった。こうした状勢の中でランダウ モポリタン的ナショナリズムの継承者として、その後一九世紀から アーは、自己のヒューマニスト的・平和主義的ナショナリズム論を 一九一一年の第二次モロッコ危機のあと、ドイツとフランスとの

止)とSPDの軍費案支持を予言するものである。 は、「カー四年八月の「城内平和」(議会闘争中ると評した。これは、一九一四年八月の「城内平和」(議会闘争中会と考える限り、戦争に対して否定的見解をとることは不可能であた。一九一年一二月のベーベルの演説に対し、マルクス主義者たちは、ヨーロッパの戦争を資本ルの演説に対し、マルクス主義者たちは、ヨーロッパの戦争を資本と考える限り、戦争に対した。一九一一年一二月のベーベでなく、SPDの軍費案支持を予言するものである。

ランダウアーとしては、フランスのサンディカリスト、ギュスターランダウアーとしては、フランスにわたって八名、ロマン・ローラルで催され、参加する者、ランダウアー、ブーバー、テオドル・トにのである。戦争勃発に先立つ六月、国際協力を図る企てがポツダたのである。戦争勃発に先立つ六月、国際協力を図る企てがポツダたのである。戦争勃発に先立つ六月、国際協力を図る企てがポツダムで催され、参加する者、ランダウアー、ブーバー、テオドル・トイプラーその他ドイツ、フランスにわたって八名、ロマン・ローライブラーその他ドイツ、フランスにわたって八名、ロマン・ローライブラーその他ドイツ、フランスにわたって八名、ロマン・ローライブラーその他ドイツ、フランスにわたって八名、ロマン・ローライブラーその他ドイツ、フランスにわたって八名、ロマン・ローライブラーその他ドイツ、フランスにわたって八名、ロマン・ローライブラーその他ドイツ、フランスにわたって八名、ロマン・ローライブラーその他ドイツ、フランスにわたって八名、ロマン・ローライブラーを対象がある。

たハンス・コーンも、著名な作家や学者の多くが戦争支持に傾いたたハンス・コーンも、著名な作家や学者の多くが戦争支持に傾いたも知れない。

掲載した。 戦争反対の理由は主として道徳的根拠にあり、アナキスト、コス 戦争反対の理由は主として道徳的根拠にあり、アナキスト、コス

一九一五年四月、『デア・ゾチアリスト』が廃刊をよぎなくされてのちには、ゲーテ、ヘルダーリン、ゲオルク・カイザー等に関すたのちには、ゲーテ、ヘルダーリン、ゲオルク・カイザー等に関すた。上記「新祖国同盟」の正式メンバーではなかったが、その陰のた。上記「新祖国同盟」の正式メンバーではなかったが、その陰のた。上記「新祖国同盟」の正式メンバーではなかったが、その陰のた。上記「新祖国同盟」の正式メンバーではなかったが、日盟の活動は軍当局によって徹底的に制限が発出されている。

一九一六年にランダウアーはベルリンで、中産階級婦人たちのためシェクスピアに関する連続講義を行なった。これから前記のブー専門学者は「学問的ではない」と評したが、アルノルド・ツヴァイクは、「シェクスピア講義』が一九二○年に生れた。これを多くのりは、「シェクスピア関する連続講義を行なった。これから前記のブークは、「シェクスピア劇のドイツ語による最もすぐれた分折」と激力した。

由の可能性と己れの卑しい衝動からする不断の自発的隷従、オセロは、自我のうちなる精神と衝動との闘い、人間の精神的・倫理的自ランダウアーの見るところでは、シェクスピアの劇の中心テーマ

君・権力者に隷従する己れの奴隷であることを示すわけである。り多くの場合、人間を奴隷たらしめる権力衝動への耽溺等である。り多くの場合、人間を奴隷たらしめる権力衝動への耽溺等である。ウェクスピア劇はランダウアーに、人間が自発的に暴だ・ラ・ボエシから汲みとり、自己の権力・国家論の根底に据えたド・ラ・ボエシから汲みとり、自己の権力・国家論の根底に据えたド・ラ・ボエシから汲みとり、自己の権力・国家論の根底に据えたリーストである。ともなわない性的衝動、またはよの場合のごとく思いやりある愛をともなわない性的衝動、またはよの場合のごとく思いやりあるの場合のである。

エルンスト・ヨエルはかねてワンダーフォーゲルを社会主義の方のに向わせることにつとめてきたが、ランダウアーもブーバーとと向に向わせることにつとめてきたが、ランダウアーもフーバーととい・ハツアイル(若い見張り人)」を指導した。(ランはこのことしかかわりをもったと思われる)。とにかく、これら団体「ハショメかがでいないが、ブーバーが特に指導したのは、別の団体「ハポかかわりをもったと思われる)。とにかく、これら団体はイスラエルかかわりをもったと思われる)。とにかく、これら団体はイスラエルかかわりをもったと思われる)。とにかく、これら団体はイスラエルかかわりをきったと思われる)。とにかく、これら団体はイスラエルかかつりをきったと思われる)。とにかく、これら団体はイスラエルかかつりをきったと思われる)。とにかく、これら団体はイスラエルかが、ブーバをという。

ていた。特に深く親しい関係をもったのは、ゲオルク・カイザー、前記のごとく戦前から演劇運動と表現主義運動にもかかわりをもっランダウアーはまた、共通の精神的態度と社会的志向のゆえに、

共感した作品は「ガス」であった。 世内の劇について月々手紙が交わされた。ランダウアーがとりわけがしたと書きおくった。その後二年にわたり、二人の間に主にカイ解したと書きおくった。その後二年にわたり、二人の間に主にカイ解したと書きおくった。その後二年にわたり、二人の間に主にカイ解したとと言う。ルドウィヒ・ルビナーなどよのという。

ある。手紙は途中押収されたという。
室することを求めた。ウィルソンを信頼できる政治家と見たからで率することを求めた。ウィルソンを信頼できる政治家と見たからでいるとし、国際軍縮会議を主任は第一に軍備競争を始めたドイツにあるとし、国際軍縮会議を主

レーニンには特別の信頼は抱かなかったようである。 むろん ツレーニンには特別の信頼は抱かなかったようである。 むろん ツレーニンには特別の信頼は抱かったようである。 した意味のことをくりかえしている。

け』再版もこれに応ずるものだったのである。 アーは望んだのである。戦争長びきへの不満、新しい戦後社会への不望の高まりの中で、あとで述べるように革命渦中の人となったランダウアーに耳を傾ける人々が増えてきた。『社会主義への呼びかンダウアーに耳を傾ける人々が増えてきた。『社会主義への呼びかい』 再版もこれに応ずるものだったのである。

た。一九一八年二月の妻の死である。打撃のあまり自殺をさえ考えしかしその前ランダウアー一身には生涯最大の悲劇の訪れがあっ

である。そしてわたしにはそのときまで力を貯えておく権利があ 働いてきた。その倒壊は間近く-制、虚偽と裏切り、貧困と抑圧を基礎とするこの社会を倒すために その春訪れたトラーにこう話した。「わたしは全生涯この社会体 働いていた、「アナルコ・ソシアリズムを基礎としての来るべき新 たという。だがやがて意をとり直し、娘たちのためと、妻とともに に、トラーはランダウアーを心から尊敬していたという。 る。そのときが来たら、その場で待ち構えているだろう。」ちなみ しいドイツの建設」に役立つため、生きつづけることを決意した。 ーおそらく明日、一年以内のこと

義的相互扶助および共同作業の形態であると考えていたのである。 となし、演劇をドイツ民族の精神的資質を向上させるための社会主 の劇場をドイツの社会的・精神的生活を再び活気づける大国民劇場 イゼ・デュモントはかねてランダウアーの芸術哲学に共鳴し、彼女 デュッセルドルフ劇場の演出者になることを求められた。支配人ル かった。ランダウアーは、ミュンヘンのほうが自分をいっそう必要 一九一八年一〇月ランダウアーは、ドイツ一流劇場の一つである しかしその翌月に起った革命のためこの仕事に就くことはできな

イエルン革命のランダウアー

としていると感じ、その地に赴くことになる。

者の大衆集会から革命運動に発展し、バイエルン王制は戦わずして ンヘンではベルリンより一日早く一一月七日から八日にかけ、労働 暴動に端を発し、その状勢は数日にして全国各地に波及した。ミュ ドイツ革命の気運は、一九一八年一月三日キール軍港での水兵の 独立社会党(USPD)のクルト・アイスナーを議長とする

> 労働者・兵士・農民評議会が成立、その名でバイエルン共和国が官 言され、ついでアイスナーを主班とする臨時革命政府が生れた。 アイスナーはランダウアーの年来の親しい友人であった。当時た

おり、ミュンヘンに赴いたのは、二週間後のことであった。 あった。ちょうどその時ランダウアーはインフルエンザにかかって に、社会主義を精神的倫理的要素をもとにして考える社会主義者で った。政治的立場はちがっても、アイスナーはランダウアーと同じ よって精神を改革するのに協力してくれることです」というのであ 来てくれるよう。わたしがあなたにやって欲しいのは、弁論活動に アイスナーから手紙を受取った。それは、「健康が許ししだいすぐ ぶんシュヴァビアの村に引きこもっていたランダウアーは一四日に

に来たときの政治状勢である。 分的には独立に活動していた。これが、ランダウアーがミュンヘン る「革命的労働者評議会」(RAR)の三つが同時に、少くとも部 一つ、多くのUSPD党員と一握りのアナキストから成るといわれ 兵・農評議会(各地評議会およびミュンヘンの中央評議会)ともう いまや革命下のバイエルンにおいては、上記の新しい政府と労・

を意図した。かくてRARは、評議会制度にもとづく社会主義的デ 会理念を基礎として建設すべき社会主義の方向に革命を導く」こと 指導するRARに加わった。RARは、ミューザムによると、「評議 とするにある。しかしランダウアーの考えはそれとちがっていた。 会議の速かな召集を約した。その考えは両者の妥協を図っていこう ナーは共和国宣言で評議会の成立を述べるとともに、憲法制定国民 ミュンヘンに来るとすぐ、政府には参加せず、友人ミューザムの 究局の争点は、議会制か評議会かの権力問題にあった。アイス

期の目標を達成するにはいたらなかった。 経営評議会を組織したが、レーテ運動のなかでは少数派であり、所 標とした。このため種々の企て、たとえばミュンヘンの工業中心に テ運動がバイエルン州議会の権力に屈従するのを阻止することを目 モクラシーを主張し、議会選挙に反対する唯一の組織であり、レー

れた今こそ、諸君自身のために闘いたまえ。」 殺戮に命を犠牲にすることを強いられた諸君よ、自由の時が告げら 失業に直面している兵士たちにとう語った。「何年も無意味な民衆 レーテ運動の急進化を押し進めようとした。そして戦線から帰り、 はいたらなかった。彼は、二つの社会党と労働組合との優勢下で、 対し、教育制度の徹底的改革案を提出したが、実施の運びを見るに ち、ランダウアーは、そこで内相エアハルト・アウアーの政策に反 しかし中央評議会ではRARはその数的勢力に不釣合な力をも

を予感してか、これには参加しなかった。 その方途に従おうとする人々から成り、ランダウアーは、その前途 スト連合」(VRI)を結成した。これは、ロシア革命を讃美し、 を見て、一一月三〇日、別のグループ「革命的インターナショナリ ミューザムは、RARがなんら目ざましい闘争を展開しえないの

年来の盟友と袂を分つことになる。 ランダウアーがミリタリストと評するレーニン主義者たちに直接協 収され、ミューザムは、マックス・レヴィーンの指導する共産党、 する羽目に追いこまれたのである。このときランダウアーは一八 RIは翌年一月、ミュンヘンのスパルタキスト団体に吸

理由は、評議会についての考えのちがいにある。ランダウアーの テ思想は次回にとりあげなくてはならないが、共産主義者のそ

> ら反対するにある。 に評議会をプロレタリアート独裁の機関とは考えず、これに真向か れとのちがいは、要するに次の点に、すなわち、共産主義者のよう

義者のものとは異なる自己の評議会論を説明した。 共和国憲法」において、SPD、ブルジョア議会主義および共産主 会での演説、および一一月執筆の重要な論文「ドイツ連合共和国と 一九一八年一一月と一二月の手紙、バイエルン国民(中央)評議

とを考えてきた。「プロレタリアートの独裁ではなく、プロレタリ 働者の意味を広く解してこれに共同社会の能動的構成員のすべてを 化による下からの参加のデモクラシーを基礎とするものであり、プ アートの廃絶こそはスローガンでなくてはならない」とある手紙に ふくめ、個別階級としてのプロレタリアートなるものを無くするこ ロレタリアートの支配などではない。もともとランダウアーは、労 要するにランダウアーの評議会論と反議会主義は、連合制的分権

プロレタリアートを永久に無くすることによってのみ達成されうる たは独裁に助力するものでもない。民主主義的社会革命の意図は、 従を永続化しようとするものでないし、プロレタリアートの支配ま のである。」 う述べた。「われわれは、プロレタリアートの窮乏、権利剝奪、隷 一二月九日、バイエルン労働者評議会の集りでランダウアーはこ

は、階級路線にしたがって結成され、上から指図される組織ではなるスローガンでしかないからである。ランダウアーにとって評議会 けない。これは、往々にして複雑な現実を一党一派の利害で割り切 つまりは、おきまりの階級利害、階級闘争の視点では問題を片づ

ト体制とは、まったく別のものである。 大権的な形態をとるものである。共産主義者の評議会またはソヴェで評議会体制は、集権化ではなく、各単位組織の自主連合から成るより、意志・政策決定への全員の参加をもって形成され、したがっより、高地域レベルにおいて、その共同社会の能動的な全メンバーにく、各地域レベルにおいて、その共同社会の能動的な全メンバーに

集を依頼されたが、引受けなかった。 集を依頼されたが、引受けなかった。 集を依頼されたが、引受けなかった。 様と依頼されたが、ボルリンでは事態が急速に転回し、SPDのプロに決した。だが、ベルリンでは事態が急速に転回し、SPDのプロに決した。だが、ベルリンでは事態が急速に転回し、SPDのプロに決した。だが、ベルリンでは事態が急速に転回し、SPDのプロに決した。だが、ベルリンでは事態が急速に転回し、SPDのテロのデュンペン機関紙の無は深刻であった。 がフィスナーからUSPDのミュンペン機関紙の無は深刻であった。 アイスナーからUSPDのミュンペン機関紙の無は深刻であった。 は深刻であった。アイスナーからUSPDのミュンペン機関紙の無は深刻であった。アイスナーからUSPDのミュンペン機関紙の無は深刻であるべくもなかった。

手痛い敗北を喫し、SPDとバイエルン人民党が勝利を収めた。 でようにというアイスナーの要請には応ずることにした。一月一二 のようにというアイスナーの要請には応ずることにした。一月一二 のようにというアイスナーの要請には応ずることにした。一月一二 のが正しいことかを語る」ためであった。案の定得票は一握りでし かなかった。レーテ運動につながる立候補者(大部分はUSPD。 かなかった。レーテ運動につながる立候補者(大部分はUSPD。 かなかった。というアイスナーの要請には応ずることにした。一月一二 のようにというアイスナーの要請には応ずることにした。一月一二 のようにというアイスナーの要請には応ずることにした。一月一二 のようにというアイスナーの要請には応ずることにした。一月一二 のようにというアイスナーは

ってきた。革命後のいまも、権威主義的体制をもち、大多数の民衆時までわれわれは権威主義体制の下にあり、民衆はこれに黙々と従批判し、「選挙の過大評価」と題する論文でこう書いた。「革命の批判し、「選挙の過大評価」と題する論文でこう書いた。「革命の上月二日、ランダウアーはアイスナーのSPDとの妥協を厳しく

シアンランでウァーはなる甚らを含ませいよいっこ。 できょう でから 疑わしくなっている。」 イツ人たる名誉ははなはだ疑わしいものであったが、いまやいっそは勝利のかっさいでこれに従っている。これら年月をつうじ……ド

対し、大多数の農民もまた保守勢力を支持していたからである。 大多数の農民もまた保守勢力を支持していたからである。 が地方的レベルにおいて建設することにより、阻止できると考 が、バイエ た、レーテこそはまさにこれに当るべきものとした。だが、バイエ え、レーテこそはまさにこれに当るべきものとした。だが、バイエ をカトリック勢力が固く結んでおり、これらは社会主義的変革に反 とカトリック勢力が固く結んでおり、これらは社会主義的変革に反 がし、大多数の農民もまた保守勢力を支持していたからである。

はこれに改名)も、ミュンヘン労働者評議会に加わっていた。 はこれに改名)も、ミュンヘン労働者評議会に加わっていた。 いん 一月一五日、ランダウアーは、労働者・兵士評議会 大会 で 演 説 一月一五日、ランダウアーは、労働者・兵士評議会 大会 で 演 説 一月一五日、ランダウアーは、労働者・兵士評議会 大会 で 演 説

を憂えたからであった。
に対して、大産党指導者によりかえされるのはが、これはそうした逮捕がレーテ運動指導者によりかえされるのはが、これはそうした逮捕がレーテ運動指導者によりかえされるのは、アイスナーの意に反して

一六日のレーテ体制存続のための大衆デモの首唱者の一人にもなっ同様の、急進社会主義者連帯の思念から、ランダウアーは、二月

票箱デモクラシーとに反対し、レーテにもとづく直接民主制を支持 することを力説した。 ら手を切り、 述べた。ついでアイスナーを訪ね、SPDとブルジョア的官僚制か はレーテとUSPDに対する反革命的反乱をたくらんでいるとさえ 大会では、攻撃のほこ先をアウエルとSPDとの関係に向け、彼ら する演説をしたとき、あらしのごとき喝采で迎えられた。一九日の 進化していた。二日前のレーテ大会でランダウアー 会改革を実現していないため、いまやミュンヘン労働者の多くが急 万人にも上った。経済状態の悪化や、アイスナー政府が見るべき社 た。説得してアイスナーをも参加させたこのデモは、USPD、 D(ドイツ共産党)、アナキストからSPD支持者をも含め、 地域的・地方的管理をもととする社会主義経済を建設 は、SP D と 投 八K

このような社会主義は、むろん各派社会民主主義者にも共産主義者にも相容れないものであったが、ランダウアーはこれをレーテ大会で主張することをちゅうちょしなかった。議会制反対では共産主会で主張することとをちゅうちょしなかった。議会制反対では共産主会で主張することとをあり、しかしランダウアーの社会理論を支持する者は少く、主に反権威主義の知識人たちに限られていた。だが、大会最終日、明二一日召集の州議会をめぐり、大会を中止してすべての権限日、明二一日召集の州議会をめぐり、大会を中止してすべての権限日、明二一日召集の州議会をめぐり、大会を中止してすべての権限日、明二一日召集の州議会をめぐり、大会を中止してすべての権限方が近く、主に反権威主義の知識であった。それは、大会は一時延期するが近く再開することとし、その問憲法と評議会制度との統合を図る努力く再開することとし、その問憲法と評議会制度との統合を図る努力く再開することとし、その問憲法と評議会制の動きが切迫するなかをつづけるというのであり、反革命的議会制の動きが切迫するなかで、評議会の権限をできるだけ守ろうとするものであった。

二月二〇日、レーテ大会の最終会議で演説をしたあと、ランダウアーは、クルムバッハに赴き、一年前に死んだ妻の命日の二月二一日を娘たちとともに過した。その日おそくミュンヘンに帰った彼を迎えたのは、アイスナー暗殺の知らせであった。悲しい思い出も新たなこの日に重なった悲劇は耐えがたいものであった。二六日の葬式で述べた弔辞のなかでアイスナーを、「愚かさと貪欲のゆえに処刑された……イエスやフスのような人」として語った。打撃は大きく、その頃のある手紙にこう書いた。「わたしとして仕事をつづけるのは――生きてゆくのはとてもむずかしいことです。」

USPDやKPDに流れこみ、またレーテ運動も急進化された。暗WSPDやKPDに流れこみ、またレーテ運動も急進化された。暗たのである。

月一七日ついに成立した。とUSPDとから成り、アイスナーの下での文化相、SPD党員コルネス・ホフマンを主班とする内閣が生れることになり、ランダウハネス・ホフマンを主班とする内閣が生れることになり、ランダウハネス・ホフマンを主班とする内閣が生れることになり、ランダウハネス・ホフマンを主班とする内閣が生れることになり、ランダウハネス・ホファンを主班といる。

ン革命に集中、むしろ縮小されたと見るべきであろう。
お一帯は、ホフマン政府の制するところとなり、革命はミュンへお一帯は、ホフマン政府の制するところとなり、革命はミュンヘンれて北バイエルンのマレンベルクに移転した。以来バイエルン州北れて北バイエルンのマレンベルクに移転した。以来バイエルン州北しばしばくりかえされ、ホフマン政府は、ベルリン政府の勧告を容しばしばくりかえされ、ホフマン政府は、ベルリン政府の勧告を容しばしばしばくりかえる。

ところでランダウアーは、さきの統一委員会提案に対する最終票ところでランダウアーは、自己のデモクラシー、中央集権制内閣や議会支配所は、評議会自体に基礎をおくデモクラシーの採択を求めた。テナ、評議会自体に基礎をおくデモクラシーの採択を求めた。所推進者、および各地域の政治生活への全住民の参加促進の焦点たの推進者、および各地域の政治生活への全住民の参加促進の焦点たの推進者、および各地域の政治生活への全住民の参加促進の焦点を表しめるとするにあった。これが、ランダウアーの階級的ではなく、評議会支配にあるとするにあった。これが、ランダウアーは、さきの統一委員会提案に対する最終票ところでランダウアーは、さきの統一委員会提案に対する最終票ところでランダウアーは、さきの統一委員会提案に対する最終票ところでランダウアーは、さきの統一委員会提案に対する最終票といる。

四月七日ついにミュンヘンで、ホフマン政府の北部バイエルンへのいわば亡命のまま、レーテ共和国が宣言された。ランダウアーがかかわりをもったかいなかについても、友人のブーバーとミューザムとの間にも見方のちがいがある。しかし宣言後には、新しいレーテ共和国の中心的人物となったことは明白である。

ず、アナキスト知識人を主とし、重立つ人々はユダヤ系であった。このレーテ共和国政府には、SPD、KPDからは一人も参加せ

ランダウアーは、実質上ミュンヘン共和国にすぎないこのレーテも、わたしはバイエルンに 永続的な成果を残したいと思って い るも、わたしは バイエルンに 永続的な成果を残したいと思って い るも、わたしは バイエルンに 永続的な成果を残したいと思ってい ろも、わたしは バイエルンに 永続的な成果を残したいと思っているし、あなたもそうだろうと思う。」

草に熱心に取組んだ。

立なが、紙上プランに終った。ランダウアーは文化・教育制度の改には着手せず、銀行の国有化を公布し、住宅と食料の不足緩和を企いにが、紙上プランに終った。 政府すなわち中央評議会は、経済や行政の改革に が何かの成果を挙げるには、ミュンヘン・レーテ共和国はあま

加させ、大学をリバータリアンな協同組合社会にしようとした。部を統合し、特に重要なこととして、大学の管理に学生と講師を参に、労働者階級出身者に大学の門戸を広く開き、科学と哲学との学に、労働者階級出身者に大学の門戸を広く開き、科学と哲学との学に、労働者階級出身者に大学の門戸を広く開き、科学と哲学との学に、労働者階級出身者に大学の門戸を広く開き、科学と生と講師を参加させ、大学をリバータリアンな協同組合社会にしようとした。

こうした考えを盛りこんだランダウアーの教育改革プログラムは

という。)
という。)

を宣告することは阻止した。

またランダウアーは、目標達成のためにも強制力を用いることをまた、体制への積極的な敵対者を含む何人に対しても死刑ト、その他反革命の企てを非難する声明には参加したけれども、トト、その他反革命の企てを非難する声明には参加したけれども、トト、その他反革命の企てを非難する声明には参加した対しなが、ミューザムがしばしば採用しようとしたボリシェヴィキ的な非し、ミューザムがしばしば採用しようとしたが、

ナチが最初の党員を集めたのは、この連中のなかからである。とれが、非業の死を迎える原因にもなったといえよう。ちなみに、れが極右団体「トゥーレ協会」によって義勇軍の間にひろめられ、たヒューマニストの面ではなく、まったく逆の中傷誹謗であり、そんとューマニストの面ではなく、まったく逆の中傷誹謗であり、そしかし、ランダウアーについていいふらされていたのは、こうししかし、ランダウアーについていいふらされていたのは、こうし

「コーヒー店」レーテ共和国とあざけられ、共産主義 者 からは「見せかけのソヴェト」と攻撃された、トラー・ランダウアーのした、かねて武力を用意していた共産党だけであった。かくしてオイビン・レヴィネを議長とし、大部分が共産党員である一五名から成るゲン・レヴィネを議長とし、大部分が共産党員である一五名から成るが、・レヴィネを議長とし、大部分が共産党員である一五名から成るが、・レヴィネを議長とし、大部分が共産党員である一五名から成るが、・レーテ(ソヴェト)共和制がミュンヘンに宣言された。

るものである。」
したのあともランダウアーは、反革命に対する統一戦線の結成に協力する旨を新政権に申入れ、公の声明でもこう述べた。「レーテ共和制の)を認め歓迎する。旧中央評議会はもはや存在しない。テ共和制の)を認め歓迎する。旧中央評議会はもはや存在しない。かたしは、必要に応じて用いるよう、自分の力を行動委員会に委ねわたしは、必要に応じて用いるよう、自分の力を行動委員会に委ねわたしは、必要に応じて用いるよう、自分の力を行動委員会に委ねわたしは、必要に応じて用いるよう、自分の力を行動委員会に委ねるものである。」

た」と述べているという。 大産主義者と思われるハンス・バイヤもその『一一月 革命から 兵産主義者と思われるハンス・バイヤもその『一一月 革命から 兵産主義者と思われるハンス・バイヤもその『一一月 革命から

たちに書き送った。

でなかった。行動委員会がボルシェヴィキ的方策を採り、中産階級のなかった。行動委員会がボルシェヴィキ的方策を採り、中産階級のなかった。行動委員会がボルシェヴィキ的方策を採り、中産階級の は、革命の挫折 しかしランダウアーの共産主義者への協力申込みは、革命の挫折

な部分しか保持されていないことを最も残念に思っている。」 を
のはお互いさまだと。
の温かさと向上、文化と再生の仕事のごくわずからとした仕事、心の温かさと向上、文化と再生の仕事を少しでも
そこなうのはわたしの本意ではない。だがわたしは、わたしがやろ
そこなうのはわたしの本意ではない。だがわたしは、わたしがやろ
そこなうのはわたしの本意ではない。だがわたしは、わたしがやろ
そこなうのはわたしの本意ではない。
だがあれていないことを最も残念に思っている。」

という苦悶」とだけ書いたメモを手渡したことを語っている。。でランダウアーが隣席のブーバーに、「なんという苦しみ、なんのなかで、いつのことかは明らかにしていないが、政府関係者の会記「ハポエル・ハツアイル」の集会におけるランダウアー追悼の辞記「ハポコル・ハツアイル」の集会におけるランダウアー追悼の辞記「ハポコル・ハツアイル」の集会におけるランダウアー追悼の辞記「からのことであろう。ブーバーは、一九二〇年四月プラハでの、前本のながランダウアーの考えとはちがう方向に動いたのはもっと前

ヘン郊外グロス=ハーデルンのアイスナー家に引きこもった。とのあと、ランダウアーは研究生活に戻るため娘たちと、ミュン

一方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を発見し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産主義者のソヴェト共和国はその赤軍を召集し、ベルリー方、共産を対した。

れたであろうという。指揮する大尉は、裁判にかけることを約し、彼はコミュニストではないといってとめなかったら、その場で殺さ彼して五月一日、アイスナー家の書斉で逮捕された。ある隣人が

「『ランズウァーン、ラングウァーンによいないである。日早朝、ミュンヘン近くのシュターデルハイム監獄に移され、そとの庭で殺された。その模様をトラーは目撃者の証言から得たものとしてこう述べている。

46

「『ランダウァーだ、ランダウァーだ』という叫びが わき起るなかで、バイエルン・ヴュルテンベルク歩兵の一隊が、彼を調べ室の出入り口から廊下に引出した。一士官が彼の顔をなぐり、兵士たちはこう叫んだ、『きたないボルめ、奴をやっつけろ』雨のように振りおとされるライフル銃の床尾で打たれながら、彼は中庭に追い出された。彼は問りの兵士たちにいった。『わたしは君たちを裏切りはしなかった。君たちはどんなにひどく裏切られたか知ら ないのだ。『フォン・ガーゲルン男爵というのが 重い棍棒で 彼を地面に打ち倒した。彼はやっとのことでまた立ち上り、何か話そう としたが、兵士の一人が彼の頭を撃った。ついで 親衛兵の下士官が叫んだ、『上着を脱がせろ』 兵士たちは、彼の上衣を引脱ぎ、腹ばいにねかせた。『あとに退れ、奴をちゃんと片づけよう!』 こう一人がいって彼の背中を撃った。ランダウアーはなおもけいれんするように身を動かした。すると彼らは彼を息が絶えるまで 踏み つけた。そのあと裸にし、洗濯場に放りこんだ。」

白軍のため戦いで殺され、あるいは裁判なしに処刑された者、六

の収容所で殺された。
の収容所で殺された。
他の革命指導者たちも捕えられ、裁判にかけられて。
がリステントの収容所で殺された。
他の革命指導者たちも捕えられ、裁判にかけられる。

にはほとんど加わらず、議論は主にブー 記のなかで、すでに二月のある日、ミュンヘン議事堂の会議場に数 にはいつもの彼ではなく、心の平静と情動の安定を欠いていたこと の死とアイスナーの最後は、医すべくもない痛手を心に 残し てい た。――一年前妻が致命的な病気でたおれ、いま彼は心の中に彼女いる。「彼は意気が銷沈し、ほとんど疲れきっているよう に 見 え 名の革命指導者が集った折、自分でテロの議題を提供しながら討論 は、何人もの友人が語っている。ブー た。レーテ運動に参加し、指導的役割に献身したものの、革命末期 か。彼はもはや生きている理由がなかったからだともいわれる。妻 なかったし、逃げることはできたのに、どうして逃亡しなかったの の死を甦らせていた。」 ト指導者との間で行われたときのランダウアーの様子をこう述べて ところで、ランダウアーはもはや革命運動の責任ある立場にはい バーも友人の死をめぐる回想 バー 自身と一スパルタキス

の種類の殉教者、静かな、控え目な殉教者をもたらすべき時であずびかけ』からの次の一文が刻まれた。「いまや英雄的ではない別群った。一九二五年そとにミュンヘンのアナキスト、サンディカリ界った。一九二五年そとにミュンヘンのアナキスト、サンディカリ群った。一九二五年そとにミュンヘンのアナキスト、サンディカリ群った。一九二五年そとにミュンヘンのアナキスト、サンディカリ難った。一九二五年そとにミュンヘンのアナキスト、サンディカリ難ったが、娘のシャルロッテは五月九遺骸は大衆墓地に運ばれてあったが、娘のシャルロッテは五月九遺骸は大衆墓地に運ばれてあったが、娘のシャルロッテは五月九

ウのユダヤ人墓地に移された。 ち、その人はまともな生活の実例を指し示すであろう。」 一九三三

義」、 うなものだったのか。 は、彼にとって、革命への大きな確信と意志とに浸透されてい とりわけ建設しようとする社会主義的現実について計画したす シェクスピアまたはドイツ神秘家を対象にしているときでも、また ダウアーが考え計画したすべて、彼が語り書いたすべては、それが 動、仕事はかなり多方面にわたっている。ブーバーによると、ラン なく統合され、独自の思想をなしているかいなか、これを 探る の を意味するものである。とれら諸要素がどのように絡み合い、矛盾 民族主義、リバータリアニズム等種々の要素が絡み合っていること い)、他の人々からは「神秘的アナキズム」、「ロマン主義的社会主 て特徴づけたが(もっとも、この言葉はごくまれにしか用いていな る。いうまでもなく、その思想に、神秘主義、ロマン主義、さらに (『ユートピアの途』)。 ランダウアーは、自己の思想を「アナルコ・ソシアリズム」とし 次回の課題である。また本稿で明らかにしたように、その活 「文化的社会主義者・アナキスト」等、さまざまに呼ばれてい では、 ランダウアーが考えた革命はどの べて